

目的 近年の著しい社会環境の変化は、食生活にも大きな影響をもたらした。食生活の簡便化指向もその一つといえよう。調理済食品、冷凍、半調理品、レトルト、インスタント食品、合成調味料などの家庭の食事への導入による調理時間の短縮が簡便化の大きな要因となっていると思われる。私達は食生活の実態を把握する一方法として、調理時間を用いた数量解析を行い、短大生の家庭の食事内容について検討してきた。日常の食事内容は、食事管理にたずさわる母親の食事に対する意識が大きく関与するものと考えられる。そこで今回は、短大生の母親と幼稚園児を持つ若い母親を対象に食事に対する意識調査を行い、両グループ間の比較を試みた。

方法 対象は幼稚園児母親および短大生母親各約160名とし、日常使用される食品から経済性、栄養面、嗜好傾向、使用頻度などを基準に食品を選び、各群6品ずつ8群に分類し、SD法により各食品群のイメージプロフィールを作成した。さらにそれらについて主成分分析を行った。また個人差をとるための多次元尺度法INDSCALを用い、幼稚園児および短大生の母親の食品に対するイメージの相違を調べた。ついで調査にあうられた食品に対するイメージと日常食事において摂取されている料理との関連をみるため、8群の各食品を使用した料理について5日間の摂取状況を調査した。

結果 幼稚園児と短大生の母親との間の食品に対するイメージについては、2, 3の食品群において顕著な差がみられた。またクラスター分析を行ったところ、各母親とも4つのタイプに分類され、幼稚園児母親と短大生母親の両グループに相違が認められた。